

「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり」

この夏は雨が多く、夏の暑さをあまり感じないうちに、朝夕は涼しくなり、あっという間に秋になったような気がします。

この夏は、東京でオリンピック・パラリンピックが開催されました。

9月5日パラリンピックの閉会式を見ながら、東京で2回目の夏季オリンピック開催が決定した平成25年（2013年）を思い出しました。

東京とイスタンブールの決戦投票となり、IOC国際オリンピック委員会のジャック・ロゲ会長が「東京」と読みあげたあの場面は鮮明に覚えています。歓声と拍手が鳴り止まず、フェンシング競技の太田選手が歓喜の涙を流し、ガッツポーズを何度も繰り返していたあの場面です。

日本での56年ぶりの夏季オリンピック開催決定に日本中が歓喜し、7年後は素晴らしい未来が待っているという高揚感に包まれた瞬間でもありました。

しかしながら、2020年のオリンピック・パラリンピックは1年延期され、2021年のオリパラは新型コロナウイルス感染症のため、緊急事態宣言下、ほとんどの競技が無観客開催という形で実施せざるを得ませんでした。

平成25年時に私自身が思いを馳せていたものとは、大きく違うものとなりました。

話は変わりますが、この夏に、檀家であるお寺に行く機会があり、そこで住職さんの法話で聞いたのが標題の平家物語の有名な冒頭の一節「祇園精舎の・・・」でした。この世のことは、常に変化し、不変なものはないという仏教の教えです。

東京開催決定の歓喜の瞬間からコロナ禍のオリンピック・パラリンピック開催も、無常ということばがあてはまるような気がします。

この秋も、3年生が就職試験・進学のための受験対策に必死になっている姿が学校では見られます。「この世は無常だからこそ、今この瞬間に感謝しながら、一つ一つを精一杯やっていかないといけないよ。」と生徒たちを応援します。すべてのものは変化します。変わることは動くことであり、エネルギーを必要としますが、目標に向けエネルギーを蓄え志を持ち、目的を達成して欲しいと思います。

私は、この夏に「親終い（おやじまい）」を経験しました。

面接の練習に訪れた生徒たちには、最後に必ず「親孝行な子どもになるんだよ。」ということばを添えて励ましています。

